

論 文 要 旨

フィクションの鑑賞行為における認知の問題

石田 尚子

本稿の目的は、映画や文学、絵画、漫画などのフィクション作品の鑑賞行為とはいかなる認知の行為なのかについて、独自の論点を提示することである。

そもそもある作品が「フィクション」あるいは「ノンフィクション」であるという区分は、その作品のジャンルを示すものとして一般に使用されている。だが実際には何がこの区分を特徴づけているのか、つまり何がフィクションの実質をなすのかについては不明確であり、検討の余地がある。ゆえにフィクションの哲学においてはフィクションの実質について多く議論がなされ、とりわけ分析哲学における先行研究においては、フィクションの鑑賞行為そのものの中にフィクションの特徴を求められるようになった。つまりフィクション作品の鑑賞行為は、ノンフィクション作品の鑑賞行為とは異なる特性を持ち、それぞれがフィクションとノンフィクションの区分の基準であると考えたのである。例えばホラー映画に登場する怪物を怖がる時、鑑賞者はたいていの場合それがフィクションであり、怪物は実在（現実存在）しないと知っているにもかかわらず、鑑賞者は映画の怪物を怖いと思う。これはノンフィクション作品を鑑賞する際、あるいは現実の事物に対しては起こり得ない現象である。つまり「実在しないと知っているものに対して情動をもつ」という状況が、フィクション作品の鑑賞においてのみ合理的に成立している。このように考えると、フィクションの鑑賞行為には固有の特性があるように想定できる。したがって、鑑賞行為の説明によってフィクションの区分の基準を求める議論は数多く論じられるようになった。

こうした議論の中で、最も広く受け入れられてきたのはウォルトンによるメイクビリーブ理論である。この理論は、鑑賞者はフィクション作品を鑑賞する際に当該作品を小道具としてメイクビリーブ（ごっこ遊び）をするのだと論じるものであり、文学のみならず絵画や映画にまで幅広く対応できるとされてきた。だがこれに対する批判もまた多く行われており、中でも近年大きな反響を生んだのがマトラヴァーズによる議論である。マトラヴァーズは、フィクション作品の鑑賞行為は、他の認知の行為と比べて、さしたる固有の特性を持たないと主張した。彼の主張はメイクビリーブ理論における問題点を解決し、フィクション鑑賞に特性を認めないという点でフィクションの哲学に新たな展望をみせるものとして評価を受けているが、こちらにもまた問題点がある。それは、鑑賞者がフィクション作品の鑑賞に際してもつであろう作品のフィクション性の認識について触れられていない点である。端的に述べれば、鑑賞者は鑑賞する作品がフィクションであることを、たいていの場合あらかじめ知っている。また、ある作品を「フィクションだ」と思って鑑賞する場合と、「ノンフィクションだ」と思って鑑賞する場合とでは、情動的反応を含めた鑑賞者の態度は変化する。この点について考慮することなしに、フィクション作品の鑑賞行為の考察はできない。しかしながらこの観点を検討している先行研究は、ほとんど見受けられない。分析哲学におけるフィクションの研究は「現実指示する対象がない」という特徴の考察から始まったものではあるが、「嘘」であることがフィクションの特徴のすべてではない。そもそも作りものとして存在していて、

それを楽しむ（批評する）ために鑑賞するものであるというのが、フィクション作品の特性である。

したがって本稿ではまず、先述した「フィクション性の認識」に着目する。フィクション鑑賞における情動の問題に関して、実在しないと知っているものに対して情動的反応をもちつつも、鑑賞者がたいいの場合フィクションと現実とを混同しない理由として、鑑賞中の鑑賞者の意識が「フィクションに没入する意識」と「フィクション性を認識する意識」とに分かれているのだとする先行研究は多い。こうした主張は煩雑な議論を行う必要がないという利点をもつ一方で、単純な問題をも抱えている。つまりたいいの場合、われわれは矛盾した二つの信念を同時にもつことはできないという問題である。

本稿では、二つの心的機能を用いた説明によって上記の問題を解決しつつ、フィクション作品の鑑賞行為の特性と、その行為内容を明らかにする。フィクション作品の鑑賞においては、先述した「フィクション性の認識」のみならず、その作品のジャンルや製作者の意図などのフィクション作品の外部にある文脈に関する背景知識が大きく関わってくる。つまりフィクションの鑑賞行為は、フィクションに没入する心的機能（IM機能）と、外部の文脈に関する背景知識を認識する心的機能（BK機能）の双方が相互に作用して成立するという特性をもつ。本稿のこの理論は、先行研究における諸問題点を解消するだけでなく、われわれがフィクションに対して深く没入している時と批評している時との態度の違いの理由について説明でき、またフィクションの哲学において重要とされ長く議論されてきた「フィクションのパラドックス」の解決案を提示できる。